

飛鳥資料館特別展

◆秋期特別展「遺跡を測る」 10月7日～11月24日

考古学の研究の上で、遺跡や遺物を計測する作業は大変重要な役割を担ってきました。発掘された古代の建物の正確な位置や方向、出土したものの大きさや形の記録は、いろいろな議論、考察の基礎資料となるものです。

近年、新聞紙上などで、さまざまな古代遺跡の発掘調査がとりあげられ、調査現場を見学を訪れる人も多くなっていますが、そこで活躍してきた測量技術の実際は、ほとんど知られることがありません。

今回の展覧会では、歴史学の大切なパートナーとしての計測学に注目し、両者の関係をふりかえり、考古学的発掘の黎明期から、現在に至るあいだ、調査の記録を受け持ち、研究をささえてきた、様々な測量器械、計測システムの変遷をたどり、最新の技術、方式に至るまでを紹介しました。

たとえば発掘で明らかになった遺構を、測り図化する方法も、巻き尺で距離をはかり、アリダードで方位を決める平板測量、水平に打ちつけた横木に張り渡した水糸を基準とするやり方測量。そしてステレオ・カメラによる写真測量へと変化してきました。

写真測量は、もともと写真から地形の大きさ、高さなどを読みとり地図をつくることを、大きな目的として開発された技術で、第二次大戦中に急激な発展を見せまし

た。そしてその発展分野はさまざまな形で、考古学に応用されています。「写真判読」は空中から地下に埋もれた遺跡をさがすのに使われ、「近接写真測量」の技は、すばやく正確に遺跡を測量するため広く役立っています。

またこの近接写真測量は、巨大な仏像や、複雑な形をした石造物など、精密な図面をつくるのが難しい対象物の計測図化にも、大きな威力を発揮し、様々な場合に対応するために、種々のカメラも開発されてきました。

このほかにも、遺跡の位置を正確に決定するのに、つかわれてきたトランシット、測距儀なども1台で角度・距離を計測する能力を持つトータル・ステーションに進化しています。こうした、コンピュータを組み込んで、目標を視準する事によってたちどころに目標点の3次元座標値を表示する装置も、最近の遺跡調査で、活躍するようになっています。

展示は、できるだけ実際の装置をならべて、考古学の研究を支える測量技術を、わかりやすく説明することを目指しました。会場には写真測量によって図化した仏像をプロッターで打ち出すコーナーや、自動追尾型トシットの動きを観覧者に確かめてもらうコーナーも用意しました。また同時に、飛鳥を中心として、平板測量、やり方測量、航空写真測量など、さまざまな方法でつくられた記録図面の実物を例示し、考古学、建築史、庭園史、美術史といった、歴史研究の発展と測量技術の関わりをとらえなおす、手がかりとしました。

◆特別講演会・その他

本年度は春に第2展示室「山田寺東回廊再現」の公開があり、関係するものも含め3回の特別講演会を行った。

・1997年5月2日

鈴木嘉吉「山田寺の建築をどう見るか」

川越俊一「山田寺の遺跡をどう掘ったか」

・1997年10月25日

坪井清足「考古学と測量」

また特別展の図録として『遺跡を測る』を刊行した。陳列品として猿石を購入した。今年度の総入館者は82,858人で、内訳は下表。

区分	個人観覧	団体観覧	有料	無料	合計
一般	28,288	11,040	75,908	6,950	82,858
高・大生	2,794	7,493			
小・中生	5,565	20,828			
計	36,547	39,361			